

令和4年度 編入学・学士入学試験問題

学類名	人間発達文化学類	科目名	小論文
-----	----------	-----	-----

問題1、問題2 の全てについて解答しなさい。

注意事項

1. 解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。
2. 解答は横書きとすること。
3. 2枚の解答用紙の□にそれぞれ問題番号を記入すること。
4. 句読点、引用符、括弧などはそれぞれ1字と数え、1マスを用いること。
5. 算用数字とアルファベットについては、それぞれ1マスに2字とすること。ただしこれらを単独で用いる場合は、1マスに1字とすること。

問題 1

資料 1 は太田肇著、『子どもが伸びる ほめる子育て』(ちくま新書、2013 年)の一部です。筆者の主張を要約し、それに対するあなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

【資料 1】

「叱るほめ方もある」

そこで、こんどは叱り方についても触れておこう。

当たり前かもしれないが、親や教師から叱られてやる気をなくしたという例はとても多い。また中学生、高校生の声を拾ってみよう。

- ・怒られて、せっかくしようとしていたことがどうでもよくなった (女子中学生)。
- ・今やろうとしていること、またはやっていることを先生にしつこく「早くやれ」と言われたとき (女子中学生)。
- ・先生がキレてしまったとき (女子高校生)。

いずれも、「どんなときにやる気がなくなったか？」という質問に対する回答である。

一般には、叱られると自分の考え方や行動が否定されたわけだから、自己効力感が低下するし、人間関係も悪くなる。したがってモチベーションにはマイナスだ。とくに多感な子どもの心は、親や教師の不用意な一言によって大きく傷つけられる。

ところが意外にも、叱られたことによって逆に「やる気が出た」「伸びるきっかけになった」という声も少なくない。とくに高校生くらいになると、叱られ方によってはむしろほめられるよりもモチベーションを高める場合があるようだ。

- ・(高校生のころ) 先生がテストを返却するとき、「○○(名前)はこんなもんか。もっとできると思ったんやけどなあ」と言われ、悔しくて発狂しそうになった。それから死にものぐるいで勉強するようになり、点数が劇的に伸びた (女子大学生)。
- ・それまで成績優秀だったが、天狗になっていたら中学三年になって成績が落ちはじめ、生活態度も身なりも乱れてきた。そんなとき三者面談でふだん穏やかな担任の先生から、「お前はほかのやつとは違うんやぞ、人と同じにしてたらあかんのやぞ」と言われた。その言葉によって自分が認められているとわかってだけでなく責任の重さを感じた。その後、懸命に勉強し、第一志望の学校に合格できた (男子大学生)。

これらのケースは、「叱る」という形はとっているものの、**実質的には相手の潜在能力を認めている**わけである。学校教育の場では他の生徒と平等に扱わなければならないため難しい面もあるが、子どもにとっては特別扱いされたということでプライドがくすぐられ、やる気に火をつけることがある。

一般に人前で叱ることはプライドを傷つけるためタブーとされるが、団体競技でチームのエースが「お前ほどの者が……」とみんなの前で叱られたら、前向きに受け止めるだろう。

叱って伸びる子、やる気をなくす子

このようにプライドをくすぐるような叱り方をしようとするれば、背後に信頼関係がなければならぬ。叱るには信頼関係が不可欠だといわれるのはそのためである。

しかし、信頼関係がなければ叱っても無意味だ、逆効果だとはいいきれない。叱られて発憤したり、悔しさをバネにしたりすることでやる気を出す場合もあるからだ。実際、第1章で紹介した大学生のアンケートで述べられているように、叱られてプライドを傷つけられたが、見返してやろうという気持ちになり、伸びるきっかけになったというケースは少なくない。親や塾の教師に突き放されたり見放されたりしたことで「何くそ」という気持ちになり、それが成績アップのきっかけになったという例もある。

このように叱られたことをバネにしてがんばり、成績も伸びたという話がたくさんある一方で、同じように叱られてもそれで自信を喪失し、いっそうやる気をなくしてしまうケースも少なくないはずだ。

叱られて発憤するか、やる気を失うか、いわば分水嶺のような役割を果たしているものがある。それは俗に「負けん気」と呼ばれるものだ。負けん気が強い子は信頼関係の有る無しにかかわらず、叱れたらむしろ発憤してがんばる。しかし、負けん気が弱い子は叱られたらやる気をなくしてしまう。

その負けん気を背後で支えているものが自己効力感である。単純に言えば、「見返してみせる」という自信があればがんばるし、その自信がなければあきらめるしかない。つまり、負けん気が強いかわ弱いかは単なる性格の違いというより、目の前の物事に対してどれだけ自信をもって立ち向かえるかという問題なのである。

したがって叱る場合には、相手の自己効力感がどのレベルにあるかを正しくつかんでおかなければならない。そのためにも、ふだんから子どもをよく理解しておくことが大切である。

ほめることと叱ることは一見、対立関係にあるかのようだが、広くとらえるならどちらも承認の一種である。たとえていうと寒暖計のプラスとマイナスのようなものであり、正しいフィードバックを送るには両方が必要だ。そして、ほめ方も叱り方もポイントは同じであり、いずれの場合にも相手の自己効力感を正確にとらえ、それにどのような影響を与えるかを考えてこそ効果的な承認が行える。

叱り方のポイント

最後に、叱ることについていくつかの実践的なアドバイスをしておこう。

叱ることも広い意味では承認の一種だとはいうものの、叱られるとたとえ一時的にせよ心が傷つく。とくに最近の子は昔と違って叱られた経験が乏しい。家庭では親が子を傷つけないよう真綿でくるむようにして育てるし、けんかをする兄や姉もいない。いたずらをして近所のおじさん、おばさんに叱られた経験もない。学校でも、生徒を厳しく叱ると親が飛んでくるので教師はなかなか叱れない。とにかく今の子は叱られた経験が極端に少ないのだ。

ところが、いつまでも叱らずにはすまない。叱られた経験のないまま社会に出て、会社でちょっと叱られたり注意されたりするとひどく傷つき、落ち込んでしまう若者が増えている。たった一度叱られただけで上司との人間関係が破綻したり、欠勤や離職にまで発展したりするケースが多いといわれる。

そうした若者像の例外が、大学の体育会系クラブ出身者である。体育会系クラブには今なお理不尽ともいえる上下関係が残っていて、下級生は上級生に叱られたり怒鳴られたりしながら鍛えられていく。企業のなかには体育会系クラブ出身者を好んで採用するところが少なくないが、それは純粹培養で極度に打たれ弱くなった若者が多い現実を反映しているといえよう。もとより理不尽な上下関係やパワハラまがいの行為を是認するわけにはいかないが、実社会では叱られることがあり、それがあつ程度は必要でもある以上、叱られることへの耐性が低い若者の増殖はやはり問題である。

このように打たれ弱い大人になるのを防ぐには、子どものころから適度に叱って免疫をつけておく必要がある。そうすれば少々叱られても冷静に受け止められ、自信を喪失することはない。だからといって無理に叱る必要はない。ほめるべきときにはほめ、叱るべきときに叱ればよいのである。

とはいえ、叱るよりほめることに重点を置くべきなのはいうまでもない。では、ほめるのと叱るのとの比率はどれぐらいが適当なのか？

実証的な根拠はないが、世界的に有名な某アメリカ企業で聞いたところによると、経験的にほめるのを五、叱るのを一ぐらいの比率にするのが望ましく、社内ではそのように指導しているそうである。日本企業のマネージャーに聞いても、おおむねそれぐらいの比率が望ましいだろうという。子どもにそのまま当てはまるかどうかわからないが、一つの目安にはなりそうだ。

それから、ほめるのと叱るのとの順番はどちらがよいかもよく聞かれる。

先に叱ると相手は心を閉ざしてしまい、あとでほめても慰めにしかとられない。一方、先にほめたら相手の心に余裕ができるので、あとで多少厳しいことを言っても素直に受け止める。したがって、叱る場合にはできれば最初にほめておいてから叱るとよい。

そしてもう一つのポイントは、あま感情を込めず、簡潔かつ具体的に叱ることである。そうすれば叱る言葉に込められたメッセージは確実に伝わるし、感情的なしこりを残さなくてもすむ。相手が子どもであっても、「〇〇は△△だからよくないので、止めなさい」と簡潔に伝えればよい。

問題 2

資料 2 は内田樹著、『街場の芸術論』（青幻舎、2021 年）の一部です。著者の主張を踏まえて、「言論の自由」について、具体的な事例を挙げながらあなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

【資料 2】

あらゆる言葉はそれが誰かに聞き届けられるためのものである限り 口にされる権利がある。これが「言論の自由」の根本原理と私の信じるものである。およそ人間の脳裏に生じたすべての言葉は、それが人間の脳裏に生じたという一事を以て、何らかの人間の真理を表示している。そして、どのようなものであれ（それが人間の底知れぬ邪悪さや愚かさについての真理であっても）人間にかかわる真理は沈黙に勝る。

私はそう信じている。「言論の自由」にかかわるすべての推論はここから出発する。

そんなことわかりきったことじゃないかと言う人がいるだろう。そうだろうか。それほどわかりきったことだろうか。私はそうでもないと思う。具体的な例を取り上げてみよう。

少し前にヨーロッパに歴史修正主義という思潮が登場した。その中の一人にフランスの歴史学者ロベール・フォーリソンという人がいて、ナチスのユダヤ人強制収容所にはガス室はなかった、ユダヤ人たちは伝染病で死んだという説をなしたことがあった。当然のようにヨーロッパのメディアはこの説に裂しい攻撃を加えた。

このときアメリカの言語学者ノーム・チョムスキーは、「言論の自由」を擁護する立場から、人は誰であれ言いたいことを言う権利があり、とりわけ、その意見が人々の神経を逆なでするようなもの場合は、一層擁護されねばならないと書いた。

「議論の余地なく自明のことは、表現の自由の擁護は自分が賛同する意見にのみ限定されるべきではなく、すべての人がそれを耐え難いものとみなすような見解においてこそ、もっとも力強く擁護されるべきであるということである。」

チョムスキー自身はフォーリソンの説にはまったく同意できないと書いている。説くところには同意できないけれど、私は自分が同意できない科学的理説を公開する権利を擁護したい。チョムスキーはそう述べた。

美しい言葉だ。けれども、私はこのチョムスキーの擁護論に軽々には同意することができない。それはフォーリソンが誰に向かって、何を成し遂げようとしてその言葉を語っているのかということチョムスキーが問わなかったからである。

ことの真偽はともあれ、それによって傷つく人がどれほどいようと、汚される価値がどれほどあろうと、誰にでも言いたいことを言う権利はあるという言葉に私は同意しない。私たちは無人の荒野で、空に向かって語っているわけではないからだ。すべての言葉はそれを聴く人、読む人がいる。

私たちが発語するのは、言葉が受信する人々に受け容れられ、聴き入れられ、できることなら、同意されることを望んでいるからである。だとすれば、そのとき、発信者には受信者に対する「敬意」がなくてはすまされまい。

発語は本質的に懇請である。私はそう思っている。聞き届けられることを望まないで語られる言葉というものは存在しない。そして、もし、その言葉がチョムスキーの言うように「すべての人がそれを耐え難いものとみなすような見解」であるならば、それだけ一層、それを提示するときに、受信者に対する敬意がなくてはすまされないと私は思う。

言論の自由が問題になるときは、まずその発言者に受信者の知性や倫理性に対する敬意が十分に含まれているかどうかが問われなければならない。というのは、受信者に対する敬意がなければ、言論の自由にはもう存在する意味がないからである。

メッセージはその正否真偽を審問される場に差し出されるとき、「その正否真偽を審問する場」の威信を認めなければならない。そこで真として受け容れられることを望み、そこで偽として退けられることを望まない、という基本的な構えを放棄するようなメッセージは「言論の自由」の請求権を放棄しているのと同じことである。

「私は誰がどう思おうと言いたいことを言う。この世界に私の意見に同意する人間が一人もいなくても、私はそれによって少しも傷つかない。私の語ることの真理性は、それに同意する人間が一人もいなくても、少しも揺るがない」という人間には「言論の自由」を請求する権利がない。私はそう考える。

「私は誰の承認も得なくても、つねに正しい」と言う人が「言論の自由」を求めるのは、「すべての貨幣は幻想であり、無価値である」と主張する人間が、その主張を記した自著の印税を求めると同じく背理的である。というのは、「言論の自由」とはまさに「他者に承認される機会を求めること」に他ならないからである。

(出題者注) 出題の都合上、原文を一部変えています。

令和4年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 編入学および学士入学

人間発達文化学類のアドミッション・ポリシーをふまえて、2つの資料を与え、それぞれ600字以内で論述させることにより、受験者の理解力・思考力・表現力を総合的に判断する。

問題Ⅰでは、「叱り方」に関する文章を読み、筆者の主張を理解したうえで、自分の考えを述べる能力をみる。

問題Ⅱでは、「言論の自由」に関する文章を読み、筆者の主張を理解した上で、事例を挙げながら論理的に自分の考えを述べる能力を見る。